

四国遍路の再生プロセス

大賀 睦 夫

はじめに

遍路動機は多様である。一方に、天下泰平・万民快樂・家内安全・現世安穩など御利益を求める伝統的な動機がある。他方の極に、運動不足解消・ダイエットなど信仰とは無関係の現代的動機がある。近年増加しているのが、自分探しなどのスピリチュアルな動機である。これはとくに歩き遍路に多い。同様に、今日、お遍路さんの共通認識となっている「四国四転説」もスピリチュアル・モデルである。阿波・土佐・伊予・讃岐は、それぞれ、発心・修行・菩提・涅槃の道場であるとされる。四国遍路とは何か。それに対する一つの有力な回答は、四国遍路は「スピリチュアルな成長を求める旅」である。

スピリチュアルな成長というと、空海の十住心論、禅の十牛図、錬金術、聖書の出エジプト記などが想起される。これらのモデルに見られる心の成長は、生涯をかけて追求すべき課題であって、四国を一度巡った程度で実現されるようなものとは思われない。とはいえ、四国遍路には、その疑似体験のようなことがあるのではないだろうか。

遍路には苦行的側面があるので、遍路は修行だと多くの人が感じている。⁽¹⁾また、「お四国病院」と言われるように、困難を抱えた人々が四国を歩くことによって癒される例もたくさんある。結願は感動的体験であるし、結願によって、お遍路さんは、「涅槃」とはいわずとも、それなりに心の安寧を得ている

(1) 黒木賢一氏は遍路の心理的側面を理解する重要なキーワードとして、「非日常性」「苦行性」「神聖性」をあげている。黒木賢一「遍路セラピーー歩き遍路体験による心の変容ー」日本トランスパーソナル心理学／精神医学会誌『トランスパーソナル心理学／精神医学』Vol. 12, No. 1, September, 2012.

ように思われる。お遍路を始める前と後では、心の状態が相当変化するのであるから、四国遍路のプロセスを「再生」と呼んでもよいのではないだろうか。このような遍路の「再生」モデルは、現在の四国遍路の主要な「説明原理」であると(2)言ってもよいであろう。

スウェーデンボルグは、聖書に秘められている内的意味は人間の「再生」の過程であると言ひ、彼の教説の中心に「再生」を置いている。また、W. ジェイムズは、『宗教的経験の諸相』において、心の鬱状態から理想的自己と現実的自己の戦いを経て、「再生・安寧」に至る過程を論じている(3)。このような再生の理論と遍路体験記に見られる再生の過程をつき合わせながら、お遍路における再生が具体的にどのように進んでいくのか明らかにしようというのが本稿の目的である。

1. 遍路の制度

遍路の特徴のひとつは、巡拝方法における自由度の高さである。四国遍路は民俗宗教なので、お寺が札所とはいえ、必ずしも宗教組織による強力なコントロールが効いているわけではない。星野英紀氏は「四国遍路は制度としての日本仏教の中核からは逸脱した、あるいは組織としての真言宗からみれば周辺の(4)で逸脱した性格をもっている」と述べている。遍路は弘法大師ゆかりの八十八箇所の霊場を巡拝していただくだけである。その際、交通機関を利用してよいし、歩いてよい。どこから始めてもよいし、順打ちでも逆打ちでもよい。

ただし、お遍路の自由度は高いとはいえ、霊場会が推奨し今日の遍路の標準形となっている巡拝作法がある。いわばゆるやかな制度である。そのうちで、特に再生に関わるものとして、白衣、懺悔文、十善戒、般若心経をあげることができる。白衣には非常にシンボリックな意味があり、白衣を着るとお遍路さ

(2) 頼富本宏氏は、四国四転説には長い歴史があること、四国遍路の現状を語る一つの説明原理として制度化されていることを指摘する。頼富本宏『四国遍路とはなにか』角川学芸出版、2009、10ページ。

(3) W. ジェイムズ『宗教的経験の諸相』(上)、岩波書店、第6～10講。

(4) 星野英紀・浅川泰宏『四国遍路』吉川弘文館、2011、37ページ。

んに変身するという意識が生まれる。また、懺悔文、十善戒、般若心経は遍路における数少ない教義である。

現在では、霊場のおつとめは懺悔文からという人が多い。懺悔文の意味は、「私が昔から作ってきた色々な悪い業は、遠い過去から積み上げてきた、貪瞋癡すなわち三毒によるものです。それは、体で行った・話した・思ったという三業から生まれたのです。私は今、それら全てを懺悔します」というものである。これをお勤めの始めに繰り返し唱えることは、再生にとって意味がある。繰り返すことによって、体で覚え込むことになるからである。湯浅泰雄氏が言うように、そのような「体得」した知識だけが再生のプロセスで真に力を発揮する⁽⁵⁾。

荻原井泉水は、小豆島遍路をした際、懺悔文をとえながら、これはまさに自分のために作られた言葉であると記している。「我昔所造諸悪業 皆由無始貪瞋癡 従身語意之所生 一切我今皆懺悔 私達は聲を揃えて斯く唱へるが、此の懺悔文は、私にとっては、私の感情を本當に突詰めて打出した所のものである。私が今、佛の前に立つて懺悔しようとする所の心が斯くも端的に斯くも適切に云現はされて居て、其が自然に私の口に上せしめられるといふ摩訶不思議に私はしんじつ打驚くのである。昔から此語句を口にした人は何億人に上るであらうが、多くは斯る場合のきまり文句として誦するに過ぎないであらう。然し、私こそ是を本當に自分自身の言葉として述べる、心の底から述べる。是こそ私をして唱へしめる為に作られてあつた言葉であるかとさへ思はれるのである。ただただ合掌する外ない」⁽⁶⁾。

お遍路さんが繰り返しとなえる十善戒も同様に再生を促す。十善戒は、不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、不綺語、不悪口、不両舌、不慳貪、不瞋恚、不邪見である。もちろん善や悪は数限りなくあるから、十とは言葉のあやで、「すべての」という意味に解釈すべきであろう。十善戒は、主要な悪い行いを列挙して、そのような悪をしませんと誓わせる。四国遍路は自然の中を歩く行で、

(5) 湯浅泰雄『湯浅泰雄全集 14』白亜書房、1999、33 ページ参照。

(6) 荻原井泉水『遍路と巡禮』創元社、1934、56-57 ページ。

身体運動的側面があるが、単なるウォーキングとの違いは、このように規範的枠組みがあるところである。

この点、遍路の旅は出エジプトの物語によく似ている。神は、エジプトで奴隷となったイスラエル人を約束の地カナンへと導く。出エジプトは発心で、乳と蜜の流れるカナンは涅槃の境地、そしてそこへ至る歳月は戦い・修行の連続であった。その途中、シナイ山で神から十戒を与えられる。モーゼが神から与えられた十戒は、前半の第一から第五戒が「神を神として愛すべき戒め」、後半の第六から第十までが「隣人愛の戒め」という構成になっている。後者の五戒は「殺してはならない」「姦淫してはならない」「盗んではならない」「隣人について偽証してはならない」「隣人の家をむさぼってはならない」なので、仏教の十善戒が、ほぼモーゼの十戒の後半五戒にまとめられているといえよう。仏教は神については語らない。

十善戒を守ることは難しい。だからこそ遍路のプロセスは心の中の戦いになり修行になる。たとえば、不瞋恚という戒があるから、遍路でどんな嫌なことがあっても、怒ってはならない、すべてはみ仏のはからいと考えなさいと教えられるが、遍路体験記では「つい不満を口にした」「怒ってしまった」などの反省文がたくさん書かれている。遍路で思うようにゆかないことがあっても、不満を言うのではなく、そこから何が学べるかを考えなくてはならない。

再生と関わる教義的要素の第三が般若心経である。般若心経は仏教の基本聖典、空の哲学と言われる。「色即是空」は、「物質現象に実体はない」という意味だとされるが、それを頭で理解したとしても自分のものになったわけではない。「得阿耨多羅三藐三菩提」という一節があるように、悟りにつながるかどうかがポイントであろう。お遍路さんは、悟るとはどういうことかと考えつつ、般若心経を繰り返しとなえながら歩き続ける。

お遍路は自由度が高いとはいえ、以上のような規範的枠組みの中で、空の哲学に浸かって歩くので、自然に再生へと導かれていくことになる。私は、何周も遍路を続けているあるお遍路さんに話を聞いたが、その人のお遍路動機はだんだん変わってきたという。純粋に運動不足解消で始めたお遍路であったが、

数限りなくお経をとこなえるうちに、それは自分の一部になり、次第に遍路が自分にとっての修行になってきたという。このように、遍路はシンプルであるが、白衣を着用し、懺悔文、十善戒、般若心経を繰り返すというモデルをつくることによって、お遍路さんを再生へと導いているといえる。

2. 遍路と身体性

遍路は歩く行と言える。身体性の重視は遍路の一要素である。たくさんのお遍路体験記が出版されていることから明らかなように、歩き遍路をすると本を出したいと思わせるほどの感動がある。バス遍路ではそうはいかない。生まれ変わったと思えるほどの感動を得るためには、やはり歩くこと、修行が必要であるように思われる。

スウェーデンボルグは「実践」が必要である理由を次のように説明する。人間の能力には意思と知性があり、これらが連動してわれわれは生きている。再生とはわれわれの意思と知性がともに再生されることである。しかし、知性は容易に宗教的真理の高みに上っていくが、意思の再生は難しい。たとえば、十善戒の重要性は頭ですぐわかるが、だからといって、それが容易に実践できるわけではない。したがって課題は意思の再生である。意思の再生のためには、知性を働かせるだけでなく実践が求められる。スウェーデンボルグは、人間は信仰によって霊的になるのではなく、「信仰の生活」によって霊的になるという。たしかにスウェーデンボルグの言う「信仰の生活」は重要な実践である。しかし、仏教では「修行」という彼が語らないもう一つの実践についても教えている。

湯浅氏が言うように、「ブツダの沈黙」という話で、「釈迦は、哲学的問題に対して思弁的推理の立場から考察してゆくことは、人生を生きてゆく上に必ずしも有効な力となり得ない」と教えている⁽⁷⁾。必要なことは、悟りへの実践的努力である。実践には、役立ちの社会活動など「外向の実践」と、心の内なる世

(7) 以上について、湯浅、前掲、34ページ参照。

界の探求を通じて自己の肉体的完成を追求してゆく「内向的实践」⁽⁸⁾とがある。仏教では、その内向的实践を肉体の訓練を通して行く。⁽⁹⁾すなわち「常座三昧」と「常行三昧」である。常座三昧は座り続ける修行、常行三昧は歩き続ける修行である。⁽¹⁰⁾お遍路は「常行三昧」の一種ということになる。

遍路における歩く行は、千日回峰行のような過酷なものではないが、気持ちよく歩く段階を越えた歩きである。歩き始めの1・2時間は楽しいウォーキングであるが、さらに歩き続けていると飽きるし、疲れるし、だんだん苦行に変わってくる。やめたい気持ちと戦いながら歩くという段階にまで自分を追い込む。それを何日も続ける。それが意思の鍛錬になる。また無心に歩くときがあるが、そういうときは心の深い領域に入り込んでいるのであろう。普段考えもしないようなアイデアを思いついたりする。そして、そのような経験が遍路を終わったあとの人生で生きてくる。

スウェーデンボルグが言うように、意思を変えていくプロセスは、種から植物が成長するように長い時間が必要である。遍路の数十日でただちに意思が完全に再生するわけではない。しかし、意思の再生の始まりにはなり得る。高群逸枝にとって、遍路体験は生涯にわたる心の支えだった。「私は、生活に行きづまりを感じ、物ごとに確信を失ふごとに、きまつて遍路を思ふ。遍路は私の心の故里である。あの度ましい^つ遍路道-野越え山越え、ながながと、はてしれず續いてゐる道。そこを私は、とほとほと、歩いたのである。心から涙をたたへて歩いたのである。人の世のどんな不幸でも、あの道を辿る間には、心次第で、大概はいやされるといふ氣が私にはするのである」と述べている。⁽¹¹⁾つなぎ遍路をしている家田莊子氏も同趣旨のことを述べている。薬王寺から最御崎寺への長い遍路道について、「長かった。苦しかった。暑かった…。大師も、遍路が普及して行った室町時代の以降の人々も、歩き歩いて歩くしかなかった、この行の中から何かを見出し、二十四番に辿り着いたことだろう。私も同じ

(8) 「内向的实践」「外向的实践」は湯浅氏の用語である。同上、37ページ。

(9) 同上、118ページ。

(10) 同上、119ページ。

(11) 高群逸枝『遍路と人生』厚生閣、1939、18-19ページ。

道を辿らせてもらった。大師や先輩遍路たちと同じ土の上を歩かせてもらった。そして、明日、私の辿った土の上を他のお遍路が歩く…。感動が押し寄せてきた。これから先、辛く苦しい壁が、身の上にもふりかかって来た時、この海や空の青さを思い出し、『大丈夫。あの道を歩けたんだから、きっとこの波風乗り越えられる』そう自分に言ってあげたいと思った⁽¹²⁾。歩き遍路の修行は、その後の生活に長年にわたって影響し続けるのである。

3. 遍路のはじまり：ニグレド

明るいお遍路さん、寂しいお遍路さんという言い方がある⁽¹³⁾。昔は通過儀礼としての遍路があったので若者のにぎやかなグループ遍路があった。これに対し不幸を背負ったお遍路さんがいる。明るくふるまっているお遍路さんでも、心中は暗いかもしれない。そもそも現在の生活が幸せと思っているときは、遍路に出ることはないであろう。現状に満たされないものがあつたり、何らか不幸なできごとが起きたりして、それをきっかけに遍路に出かけるのである。したがって、再生としての遍路の主人公は「寂しい（暗い）お遍路さん」である。再生の遍路の出発点のイメージは色でいうと黒である。

錬金術の作業段階は、黒色化（ニグレド）、白色化（アルベド）、黄色化（キトリニタス）、赤色化（ルベド）の順で変化するという。これが錬金術の心理学による心の成長過程のイメージである。「錬金術の作業の頂点で、結合の栄光が突如として消えうせ、闇と絶望がもたらされる⁽¹⁴⁾」。順調に見える人生であってもどこかで「闇と絶望」が訪れるときがある。そこから人生は新たな段階、ニグレドに突入する。「個性化の観点からすると、ニグレドは中年に起こる深遠な鬱状態の発作を象徴する⁽¹⁵⁾」という。右肩上がり的人生が終わり、人生の後半期が始まると、すべては死滅へと向かって転がって行くのだと思わざるをえない。遍路のきっかけとなるのは、しばしばそのような鬱状態の発生である。

(12) 家田荘子『四国八十八ヵ所つなぎ遍路』ベスト新書、2009、131-132ページ。

(13) 宮内義澄氏のことば。月刊『ピープル』1995.11、21ページ。

(14) ヨハネス・ファブリキウス『錬金術の世界』青土社、1995、255ページ。

(15) 同上、257ページ。

しかし、そのような鬱状態は年齢とは無関係に、突発的な事件によっても起こりうる。 그레이ジアが、デュルケームのアノミー概念をシンプル・アノミーとアキュート・アノミーに分類したように⁽¹⁶⁾、穏やかな鬱状態と尖鋭的な鬱状態を分けることができるであろう。前者の典型例は中年の危機や定年退職である。後者には交通事故などで配偶者を突然亡くしたといった例がある。たくさんのお遍路体験記が出ているが、定年退職者の体験記と事故や突然の病気で配偶者を亡くしたような人の体験記の印象は相当に異なる。前者のお遍路体験記は日々の行程が淡々と綴られているものが多いが、後者のお遍路体験記はドラマチックで、大きな感情の変化が綴られているものが多い。後者の体験記では、当然ながら、お遍路の始まりにおける深刻なニグレドについてしばしば言及されている。

高群逸枝の『娘巡礼記』は、そのようなドラマチックなお遍路体験記の一つである。彼女のお遍路動機はやや謎めいている。母親は3人の男児を授かったが、生まれた男児が次々にすぐ亡くなってしまふ。観音菩薩の信者であった母親は、娘を授かったら必ず巡礼をさせますと願掛けして、観音様の縁日の正月18日に生まれたのが高群であったという。彼女は、長じて、男女関係のトラブルから遍路に出ることになった。

遍路に出かける直前、高群逸枝の日常生活は混乱の極みにあった。米騒動の起きた大正7年、九州日日新聞社に入って新聞記者になろうとして失敗した高群は、窮乏生活を余儀なくされていた。堀場清子氏の解説によると「後に夫になった橋本憲三とはすでに恋愛関係にあったが、H青年から血書もらうほどの求愛を受けて同情心から振りきれずにいた」。遍路は、「憲三からは冷やかにあしらわれ、H青年からは逃げきれず、職なく、飢え、人生と生活とのいっさいに追いつめられた極北からの、捨身の脱出⁽¹⁷⁾」であった。

高群自身は、「どんな心持で巡礼を思い立ったかそれは私自身でさえちょっとでは解らない」と書いている。「ただ極端に感激し易く極端に懊悩し易く声

(16) デ・グレージア『疎外と連帯』勁草書房、1966、第4章。

(17) 高群逸枝著・堀場清子校注『娘巡礼記』岩波書店、2004、302ページ。

を放って汪然と泣き得るは不可思議に候。また妾^{わらわ}が想像は真に変怪なる暗き翼を無限無極無際涯に伸すこと凄きばかりに御座候。ある時にはまざまざと死の光景を映出し胸中ために激痛を感ずる事さえこれあり候。…冷静に自己を凝視し傍観する時如何ともすべからざる黑影あり厳乎として迫るを見る。「巡礼に—そは妾にとりていと容易なるわざに御座候。およそ停滞ほど苦しきはなし。それよりかもむしろ未知界を無謀に突破する方有意義かとさえ存ぜられ候」と述べている⁽¹⁸⁾。遍路に出かける直前の彼女の心はまさにニグレド状態にあった。

現代のお遍路体験記『へんろ長調のほり坂』の著者高久ひとし氏は、50歳の時に、病気で妻を亡くした人である。奥さんの死亡から2ヶ月後にはもう遍路にでかけていたという。遍路に出かける直前の心境が次のように綴られている。「会社の仕事も新しい生活も、以前と全く変わらないかのように進んでいた。…だが、それは不意にやってくる。体の細部から滲み出たものがあったん、心臓の下あたりでうずき、そこから上がって頬骨に集まり、出口を見つけて噴出してくる。それまで正確に刻んでいたはずの秒針が、電池切れのようにカタカタ振れるだけで先へ進まなくなる。そんな時間が襲ってくる⁽¹⁹⁾」。高久氏は、昔買って放り出していた遍路本を探し出す。そのページを捲りながら「これで何かが変わるとは期待できなかった。ただ八十八箇所という響きのいい数字が何かにつかまってきたがっている私の心を捉えていた。『1,200キロ、行けるところまで行ってみるか』⁽²⁰⁾」。そのように遍路動機が述べられている。

森寛紹氏は、自分の子供を亡くして「辛くていたたまれなくて、三度目のお四国巡拝に旅立ちました」と述べているが、それも同様の経験ではないだろうか⁽²¹⁾。その他、交通事故で夫を亡くした若いお母さん、リストラで職を失い婚約者とも別れた青年、仕事がうまくいかず鬱病を患った男性等々、数多くのニグレド状態に陥った人々のお遍路体験談がある。

人生の困難に直面した人が、なぜ遠く離れた四国にやってきて歩くのであろ

(18) 同上、15-16 ページ。

(19) 高久ひとし『へんろ長調のほり坂』文芸社、2005、8 ページ。

(20) 同上、9 ページ。

(21) 弘法大師空海刊行会『日本巡礼記集成第一集』1985、序文。

うか。失業した人は職探しを、配偶者を失った人は再度新しい生活スタイルを確立することが課題ではないだろうか。一見、問題解決とは直接関係がないような四国歩きを開始するのはなぜであろうか。

私は、遍路に出かけるとは人生を変える決意の象徴的表現であろうと思う。奥さんが健在であったとき、高久氏は遍路本で1,200キロを歩くのだと知って、それはとてもできないと思う。しかし奥さんを亡くすと、2ヶ月後には四国を歩き始めるのである。遍路に出かけられないのは生活を変えられないからであろう。遍路とは何十日もの間、家を離れて一人で歩き続けることである。その影響は、仕事、家庭生活、社会生活などすべてに及ぶ。遍路をしている間は、少なくとも仕事はできないし家庭生活もなくなる。日常生活の変化が望ましいものでなければ遍路に出かけることはできない。遍路に出るとは人生を変えるということ、すなわち古い生活の解体作業である。そのような変化こそが最大のポイントであると思う。そして、変化・解体作業には積極的意味がある。

ドール氏は「精神のカオス学」でスウェーデンボルグのこトバを引用している。「何であれ、それが秩序ある状態に戻る前に、最初に一種の混乱状態、事実上のカオスになるのは、まったく正常なことである。こうして、うまく適合しないものどうしは互いに切り離され、そして、完全に切り離された時に、主がそれらを秩序ある状態に配列される⁽²²⁾」。スウェーデンボルグが語るのはニグレドの積極的・創造的な側面である。変化が必要なとき、つまり一つのシステムから別のシステムへの移行が求められるとき、古いシステムはまず解体されなくてはならない。混乱状態、鬱状態に突入することは進歩の一プロセスなのである。まさに「あるものの腐敗は別のものの発生」である。卵が死んで鶏が生まれる。「種は新しい生命を目覚めさせるために死ぬにすぎない⁽²³⁾」。逆説的であるが、真暗闇の混乱状態、鬱状態は同時に希望の始まりでもある。

出発時の鬱状態が遍路のプロセスの中で改善されるという保証はない。鬱状

(22) スウェーデンボルグ『天界の秘義』842節3からの一節。George F. Dole, *Sorting Things Out*, J. Appleseed & Co., 1994 参照。

(23) ファブリキウス、前掲、268ページ。

態の中にどっぷり浸かって歩き続けるのみである。ますますカオス状態がひどくなるかもしれないが、そこから何かが生まれるかもしれない。高群は、いよいよ遍路を始めるというとき、遍路はたいへんだという話を聞かされる。「どこの山この山では若い女が殺されたり、姦されたり、それもいまの時節が一番わるいという。私は心細くなってきた。でも構わない。生といい死という、そこに何ほどの事やある。私は信念を得たい、驚異を得たい、歓喜を得たい、さもなくば狂奔を得たい。とにかく苦しみ悶え泣き喚いていく裡には例え方なき尊厳な高邁な信仰にも到達するであろう。私の生くべき途は、も早それ一つにあるのだ。私は、世にも尊い美しい気高い女であらねばならない。そうなる事が出来なかつたらむしろ死んでも構わないのだ⁽²⁴⁾」。彼女は遍路の苦難、あるいは死さえ覚悟する。そこからしか本当のいのちは生まれないと信じて。

4. 浄化：アルベド

錬金術ではニグレドの次の段階はアルベド（白色化）である。黒く不純なものを洗淨し、洗い清めていく段階である。「不純なものを清めず、白くさせることなく、またそのものの魂をひきもどさなければ、何もなしとげられない⁽²⁵⁾」。清めるためには水で洗淨するか、火で煅焼して白くする。お遍路で参拝する際、最初に手を洗い、口をすすぐのは、心を清めるという意味がこめられているが、これは単なる儀式で、再生につながるほどの行為とは言い難い。

懺悔する、悔い改めるという行為は心の白色化である。前述のとおり、懺悔は再生過程の重要な一段階である。スウェーデンボルグは、再生過程における懺悔の重要性を次のように強調する。「真実の信仰と本物の仁愛は悔い改めなしには存在しえない。(中略) 神の前で人間を忌まわしいものにする重大な悪が除去されないかぎり、誰も再生されることはない。そして、それらの悪は悔い改めによって除去されるのである⁽²⁶⁾」。われわれが最初になすべきことは、心

(24) 高群、前掲、38 ページ。

(25) ファブリキウス、前掲、293 ページ。

(26) E. スウェーデンボルグ『真のキリスト教』509 番。

の中の悪を見つけてそれを取り除くことである。善をなそうとすることではない。そのようにスウェーデンボルグは説く。悪を放置して善をなしても、その善自体が悪に変わっていく。逆に、すべての悪を避ければおのずと善が入ってくる。

しかし、懺悔とは悪を意識的に遠ざけるという意味で、意識的、知的レベルでの白色化である。強い意思があれば、それは努力次第で可能だと思われるが、鬱状態や無気力状態のように、感情レベル、意思レベルで黒くなっているものを白くするのは容易ではなさそうである。それにもかかわらず、遍路で歩くことによって癒しがある、遍路は「お四国病院」だと言われるのは、そのような感情レベル、意思レベルでの白色化の可能性があるという意味であろう。

(1) 無心に歩く

四国遍路においては、どのようにして白色化が進んでいくのか、その実例を見てみよう。まず、お遍路で歩いていると悩みを忘れるということがある。私自身の体験でいうと、たとえ悩みがあっても、遍路で歩き始めると、いつの間にか無心になって歩いていることに気づく。遍路は歩き続ける行であるが、歩きだした当初はいろんなことを考えながら歩いているが、やがて考え事が尽きてしまって、いつの間にか何も考えずに歩いているという状態になるのである。

深刻な悩みが片時も頭から離れたことがないという人も、「遍路ころがし」の坂道を登るときは、さすがに、がんばろうと思う以外に何も考えられなくなる。妻を亡くした高久氏は、遍路道を一人で歩くときは亡き妻との会話を続けたという。「何度同じ話をもういない相手としたらろう」。ところが、遍路ころがしといわれる場所にさしかかると息が切れる。「対話をしている余裕などなくなる。息が切れると、頭が一瞬息抜きをする。対話、息切れ、頭の息抜き、対話、息切れ、頭の息抜き。この繰り返し(27)の九日間であった」という。ここで言われて

(27) 高久、前掲、45ページ。

いる「頭の息抜き」が、心が空っぽになって鬱状態から解放される時間である。少なくともその時間は悲しみから解放されている。一種の浄化作用である。

高久氏は亡き妻の供養ということを考えてお遍路を始めた。しかし遍路は必ずしもそういうものではなかった。「四国歩きは亡くなった人のための供養ではなく、生き残った側の魂を鎮めるレクイエム、生き残ったものを応援するエールの旅である。電池切れは当分ないだろう」と記している⁽²⁸⁾。高久氏の体験記のあとがきには、結婚する娘と進路を決めた息子を思い、「次の世代が着実に築かれていく。その予感がとてもうれしい」と穏やかな心境が綴られている。「電池切れで前進できない秒針状態」であったお遍路前と何という違いであろうか。

(2) 泣く

アリストテレスが悲劇のカタルシス作用について述べたように⁽²⁹⁾、涙、泣くという行為に浄化のはたらきがある。四国遍路では感動的体験をして泣くことが非常に多い。涙を流す場面はお遍路体験記によく出て来るが、やはり高群の『娘巡礼記』の涙の場面が感動的なので、長くなるが、代表的事例として取り上げてみよう。

佐賀関から四国の八幡浜へ渡ったその最初の日から、「月夜の野宿」という厳しい旅が始まる。高群は故郷の両親を思って涙する。2日目は路傍の小屋で横になる。3日目は宿屋に宿を求めるが、遍路はお断りといわれる。途方に暮れているところで宿のお接待に救われる。雨でその家に2日お世話になる。その間に彼女は故郷を思う。「ああ幼い弟と遠い村々の灯を数えた過ぎし日の土橋は-母さまと楽しく歩いた川沿いの柳の蔭は-考えていると涙がはらはらとこぼれる。父よ母よ弟よ妹よ、共に健在におわしませ」⁽³⁰⁾。遍路を続けるとまた野宿。「ああお父様、お母様、いまおめにかかりとうございます。逸枝は今夜も

(28) 同上。

(29) アリストテレス『詩学』・ホラーティウス『試論』、岩波書店、1997、34ページ。

(30) 高群、前掲、113ページ。

草の中にやすまねばなりません。では、もう、やすましていただきます…。涙止めがたく袂を胸にして悄然と立てば、眼下の渚に黄色な花の開いているのが月の光で優しく尊くいかに⁽³¹⁾も度ましく見える」。

高知県窪川町で、12歳の可憐な少女に出会う。二人は仲よしになったが、すぐに別れなくてはならない。「さいなら」と振り返りつつ叫ぶ。しかし少女は追いかけて来る。笠の緒の紅紐を記念に渡して思いきって歩き出す。「『おねえさん』ああ、もう呼び給うな、後ろ髪を引かれるようだ。血を呑む思いで走りぬけて、山を廻ると、も早やいとしい少女の影は見ようと見られない。私は、そこに仆れるように座って、心の限り泣いた。涙がこぼれて止度がなくて⁽³²⁾」。

高知の清瀧寺で、一人の老婆に出会う。話すとなつかしい熊本弁である。やがて老婆は若い時、高群家にいた人物であるとわかる。「『何よりもお痛わしや、お繊弱^{かよわ}いお姿で草鞋を召して…』老人の涙に弱く早くさめざめと泣くので私もつい悲しくなって、二人手を取り合っては、どれだけ泣きに泣いたろう。(中略)耐^こらえようにも耐^こらえられぬ涙はハラハラと頬を伝ってこぼれ落ちる。色々な話はそれからそれへ尽きようともせぬ⁽³³⁾」。

四国の風景を見ても涙が込み上げる瞬間がある。「八月二十四日、争われぬもので黄色を帯びた陽の光の底に淋しく沈んで見える野山の姿がいかに秋らしくなって来た。風に吹かれて荒廃した草原^{こみち}の径⁽³⁴⁾に立っていると、何ともいえなく込み上げる感情が涙を誘って堪えがたい」。

高群の遍路は、彼女を観音の申し子と信じる老人との二人旅であったが、ふとした行き違いから、老人が立腹して出ていくという事件が起きる。「私は^{びっくり}吃驚して後姿を長い間見送りそして涙がハラハラこぼれた。それは一人取り残されたという心細さの涙よりかも誤解して立腹していく老翁のいたましさ、また^{ひしひし}済まぬという感じが犇々と胸に迫ったからである⁽³⁵⁾」。「ああ立ち去ったお爺さ

(31) 同上、115-116 ページ。

(32) 同上、132 ページ。

(33) 同上、167 ページ。

(34) 同上、189 ページ。

(35) 同上、209 ページ。

まよ、私はあなたにも深く切なる感謝を忘れない。私はいっさいから愛せられている。なかんずく自然の愛は私において特に烈しい。酒のような木の香に満ちた山々の懐に濡れた砂丘の胸に、ああ私の心は躍る。私は一本の草花一片の土塊にも美しい微笑を忘れない。嬉しい、楽しい、こんな喜ばしさが何処にある。感極まって私は泣く。この熱いまた白い涙を足の赤い可愛い鳥よ飛来って呑みつくしみよ⁽³⁶⁾。彼女が、一人になったときに流した涙を「白い泪」と表現しているところが心の浄化を意味していて印象深い。なお、この老人はやがて戻ってきて二人の旅が再開する。

大龍寺本堂にて、「半面腐りたる」婦人の懺悔、祈禱の声を聞く。「妾傍視に耐えず、自ら溢る涙を人知れず袂に秘めてそこを去る」⁽³⁷⁾。

弥谷寺の近くで、86歳の一人暮らしのお婆さんの裁縫の手伝いをして会話を交わす。立ち去ろうとするとお金を渡そうとする。「『これお聞き遣われ、これはな婆が大師さまへの寸志故どうかお受け遣われ。どうか』と一生懸命に仰言るので仕方なしにお受けした。一厘銭と五厘銭を打ちまぜて六、七文一何というといしい老女の心遣いであろう。私はいいしれぬ哀愁に胸うたれながら山を下った。お爺さんの事もまるで忘れてただ、人間の寂しさを、しみじみと心から哀しみつつ吐息と涙に濡れながら悄然と歩いていた」⁽³⁸⁾。

熊本に帰って家族に再会するとまた涙、涙。このように『娘巡礼記』を振り返ると、泣き通して心を浄化した旅だったのではないかと思われる。彼女は熊本に帰りついた時の心境を次のように綴っている。「頬が燃える眼が輝く、涙がこぼれる、ああ涙がこぼれる。悲しいのか嬉しいのかわからない。既^もうここにいる、と思うと、胸は一杯だ。ああ熊本に帰ったのだ、私の厳粛な戦場に、悲痛な戦場に、凄惨な戦場に。よし！私は最も尊い最も強い道をとって闘おう。」⁽³⁹⁾「向後の私は」では次のように述べている。「一切の誘惑に打ち勝って、恩淑な優佳な、尊い虔い聖い虔ましい婦人になれたらそれで結構である。父母

(36) 同上、211 ページ。

(37) 同上、222 ページ。

(38) 同上、244 ページ。

(39) 同上、289 ページ。

をよるこぼせる事—それが無上唯一の楽しみでもある。洗濯もしよう、炊事もしよう、読書もしよう、詩作もしよう。雲は私の頭の上を閑散に流れていく、水は私の目の前を緩慢に流れていく、時は私の心の底をえぐり抜けて流れていく。流れる！流れる！一切は流れる⁽⁴⁰⁾」。そこにはもう、お遍路前の困難な問題に思い悩む弱々しい姿はない。

また別の現代のお遍路体験記を見てみよう。『生きることは歩くこと 歩くことが生きること』の著者は、喜寿を節目にお遍路を開始した人であるが、涙、涙の遍路体験を綴っている。高血圧と不整脈の心配があり、行き倒れを覚悟しての決行であったというだけに、歩き遍路の実行、結願の喜びはひとしおであったと思われる。

「五番札所・地藏寺に着くと午後四時半を過ぎていた。境内には誰一人としてお参りしている方は見当たらず、ゆっくりお参りしようと本堂の前で掌を合わせた途端に一気に想いがこみ上げてきた。ただただ嗚咽に引き込まれて、『お父さん！お母さん！有り難う。この世に我が身を生み育ててくれたお母さん！今生きてこの場に立つことができる生命を授けてくれたお母さん！』『お母さん！』と、声にもならぬ声で叫び続けていた⁽⁴¹⁾」。焼山寺への登り坂十丁の丁石のところでも、「やがて六丁を越えたところで感慨が込み上げてくるのを抑えることができなくなり、涙が止めどなく流れ、『今在るまでの諸行の全てを許せよ！』と天に向かって大きな声で叫び続けると、更に涙が込み上げて、止まることを忘れてしまっていた⁽⁴²⁾」。類似の場面が数多く述べられているので省略するが、藤江氏の涙は、70を過ぎても、歩き遍路ができるだけの体力があることへの感謝の涙であり、同時に、少年時代に母親と死に別れて生じた心の傷を癒す涙であった。結願後のエピローグから引用しておこう。

「(札幌の) 我が家の近くにある伏見稻荷神社で四国遍路の結願成就の報告とお祈りをし、我が家の玄関に一步足を踏み入れた途端に嗚咽と慟哭が続いた。

(40) 同上、293 ページ。

(41) 藤江彰彦『生きることは歩くこと 歩くことが生きること！』幻冬舎ルネッサンス、2011、37 ページ。

(42) 同上、58 ページ。

気を取り直して休息しベッドに横になると、涙が止めどなく流れて止まらず、嬉し涙とは思えないまま、何の涙であろうかとしばらく戸惑っていた。結願成就を果たし得た多くの方が、もしも涙を流すとしたなら恐らく嬉し涙なのであろうが、旅発つ時のさまざまな想いをなぞると、どうしてもそのようには思われなかった。(中略) この身、この生命は、今は亡き母親が産んでくれたればこそその生命であり、ましてや、喜寿を超えるほどの長寿の身体を慈しみ育てくれたのも、母親があつてこそである。感慨無量で七十六年の想いをふつつつと噛み締め、身体を休めた。七十六歳になって初めて『四国ひとり歩き遍路』は、小学校二年生の時に世を去った母親を思い起こす、心の旅の機会となった⁽⁴³⁾」。

(3) 雨行

雨にはプラスの意味とマイナスの意味の両方がある。慈雨、甘雨というときは良い意味で、「雨が降っても槍が降っても」というときは悪い(不都合な)意味で使われている。お遍路においても雨は両義的である。しかし雨は、たいていは逆境を意味するのではないだろうか。雨を喜ぶという心境にはなかなかない。雨のお遍路は、多くの場合、戦いである。ただし、私自身、雨に打たれてすがすがしい気持ちになったこともある。

辰濃和男氏は、「雨行」「豪雨行」という修行形態があつていいのではないかという。「自分のなかのこずるさ、うぬぼれ、競争心、夜郎自大といった汚臭を放つところの垢がすこしずつ洗い落とされてゆくような気分になる。錯覚にすぎないのだが、雨や風が激しくなるのに比例して、洗い落とされる量がふえてゆくように思えてくる。こころの垢のすべてを洗い落とすことは無理だとしても、雨に打たれていると、少なくとも自分の内面と向き合うことができる。豪雨はやはり、もってこいの修行の場だ」と雨の中のお遍路体験を書いている⁽⁴⁴⁾。辰濃氏の『四国遍路』は、全編が象徴とメタファーを駆使したユニークな

(43) 同上、325 ページ。

(44) 辰濃和男『四国遍路』岩波書店、2001、102 ページ。

お遍路論である。「錯覚にすぎない」と書かれているが、雨に打たれて「清め」を連想することは自然なことである。一般に、雨は涙のたとえにも使われる。イメージとしては「洗われる」ということである。辰濃氏の『四国遍路』では、洗うに関して、霊場で口を濯ぎ、手を洗い、滝で体を洗い、杖を洗い、心を洗い、六根を洗い、といったことが書かれている。⁽⁴⁵⁾ 四国遍路でお接待を受けるたびに「洗心」という言葉を思ったとも書かれている。

(4) 人間性の回復

辰濃氏がお接待を受けて「洗心」を思ったというように、浄化は必ずしも水に洗われることばかりではない。洗うとは汚れが落ちて更新されるということであるから、古い感覚が覆されるような鮮烈な体験はすべて浄化のイメージがある。たとえば、運動不足で滞った血液が、歩くことで体をめぐり始めると、自分の体が沼池から谷のせせらぎに変わっていくように感じられる。これも浄化である。お遍路では、雄大な自然の風景だけでなく、道端の草花、畑の野菜、小川を泳ぐ魚、浜辺に寄せる波などを一つひとつ見ていく体験をする。それらはいつも身近にある風景なのであるが、車社会で見失っているのとても新鮮に映る。そのような体験の積み重ねによって、人間性を取り戻してゆく。それも「浄化」のイメージにつながる。

夫を交通事故で亡くした若いお母さんが、二人の幼い子供とともにお遍路をした体験記がある。そこで著者の安田さんが書いていることも、人間性の回復すなわち浄化のイメージである。「無心で般若心経を唱えていると、心が浄化されて行くのを感じる。シンプルで規則正しい生活リズムが、毎日の巡礼で自ずと備わってくるのを実感する。夜更かし、朝寝坊、そして車を駆使する実生活とはかけ離れた遍路旅は、身も心も健全なものに変えてくれるようだ」。⁽⁴⁶⁾

(45) 同上、215-216。

(46) 安田あつ子『お父さんと一緒に四国遍路』文芸社、2008、162ページ。

5. 悟り：キトリニタス、ルベド

黒が白に変容した次の段階は、黄、赤への変容である。ファブリキウスによると、黄色化は「月から太陽の状態、すなわち銀の状態から金の状態」への変化である。⁽⁴⁷⁾ 月から太陽の状態への変化には二段階があるとされる。第一段階は黄金の朝の太陽であり、第二段階は灼熱の昼の太陽である。前者が黄色化、後者が赤色化である。

錬金術のイメージをスウェーデンボルグの再生の教説にあてはめると、白色化は悔い改め、黄色化、赤色化は、自然の人間から霊の人間への進化の二段階に相当する。すなわち黄色の「自己改革」reformation と、赤色の狭義の「再生」regeneration である。「自己改革」は信仰の真理によって形成され、その信仰の真理によって仁愛をめざす段階である。⁽⁴⁸⁾ ここでは、知性が意思をひっぱり上げる。しかし第二の状態が始まると逆転現象が起きる。第二段階は、「意思の愛が知性の中に流れ入り、意思が知性に働きかけ、意思が持つ愛に調和するような考え方がもてるようになる」段階である。⁽⁴⁹⁾ つまり、第一段階は真理が主導的役割を演じるが、第二段階は仁愛が主導的役割を演じる。スウェーデンボルグは、「第一の状態は、にわとりが鳴く夜明け時であり、第二の状態は、のぼる太陽が輝く朝である」という。

四国四転説によると、四国遍路における再生の後半段階、は「菩提」「涅槃」である。本章はそれが課題であるが、それがどういう状態かはよくわからない。「仏性」あるいは「本来の自己」をわがものにするといっても抽象的である。白から黄、赤への変容、銀から金への変容があるといっても、さらなる高みをイメージするのみである。さいわい、スウェーデンボルグの再生の教説では、より具体的に再生の心の状態が説かれているので、本章で考える際のものさしにしたい。

(47) ファブリキウス、前掲、381 ページ。

(48) E. スウェーデンボルグ『真のキリスト教』第 571 番。

(49) 同上。

スウェーデンボルグは、愛はその人のいのちであり、その愛には3種類あるという。天上愛、世界愛、自己愛である。天上愛は主への愛と隣人愛である。一言でいうと役立ちへの愛である。世界愛は富や快適な生活など、この世が提供するあらゆるものへの愛である。自己愛は名誉、栄光、名声、優越、支配愛などである。再生した状態とは、これら3種類の愛が天上愛、世界愛、自己愛の順に配列されているということである。これが、スウェーデンボルグが教える「再生」の意味である。再生されないうちは、人間は自己中心なので、これらの愛の順番は逆転している。

一般には、世界愛や自己愛は悪いもので、富や地位を求めるのは悪のように思われがちであるが、生身の人間がそれらを排除することはできない。生きるためにはお金を稼がなければならないし、ある程度の富がなければ、献金したり人を援助したりすることもできない。社会をよくするために地位を求めることも悪いことではない。大事なことは、世界愛、自己愛よりも、常に天上愛が優先されることである。反対に、どんなに善行をしているように見えても、自己愛が最上位に来ていれば、それは地獄的である。名声を求めて多額の寄付をするというのであれば、それは社会的に一定の役立ちになったとしても、その人の愛の状態は再生とはまったく別ものである。

したがって、人が再生しているかどうかは簡単に外見でわかるわけではない。また、再生は長期にわたる変化のプロセスであるから、ある人はより多く、またある人はより少なく再生しているという程度の問題もある。そうであれば、本章のテーマでわれわれにできることは、再生した状態の実例を提示することではなく、四国遍路で再生へと向かっているプロセスを探し出すということであろう。

人間には本来悪への傾向があるので、自己中心の日常生活の常識が逆転するような経験こそが再生へ向けての変容と言えるであろう。そのようなものを探すと、お遍路体験記では次のような記述がよく見いだされる。「自分は生きていたのではなく、生かされている」「いつも当然と思っていたことがそうではないとわかった、感謝」「見ず知らずの人からのお接待を受けたのだから、自

分も他者のための無償の行為ができるようになるう」「緑の葉っぱが枯れて土に返るように、私も土に返る、怖れるものは何もない」。お遍路体験記にはそのような記述がたくさん見られる。

このような常識を逆転させるような意識が、遍路でなぜ生まれるのか考えてみたい。現代の豊かで便利な生活は、われわれを人間の原点的な場所からずいぶんかけ離れたところに連れてきてしまっているように思われる。そして、お遍路はわれわれをもう一度原点に連れ戻してくれるようである。遍路では、驚くほどお腹が空く、のどが渇く、疲労感を味わう。そのようなとき、食べ物がある、飲み物がある、体を休める場所があることが、それだけで何とありがたいことかと感謝の念がわいてくる。それを無償で提供するお接待があると感涙ものである。遍路道を整備してくれる人があり、道しるべがあり、四国の人々の応援があるから、1,200キロもの長い距離を歩くことができる。たくさんの人たちのおかげで生きていくことができる。これも感謝である。そういう心を、われわれは豊かで便利な生活の中で見失っているように感じる。

亡き夫の供養のために子供たちと遍路をした安田さんは、遍路による心境の変化を次のように綴っている。「夫を喪ってから私は、自力で生きなければ、自分で乗り越えなければ、何事も自分で…自分で…と必死で事に当たってきたものの、いざ一つ一つの節目を越えるたびに思うのは、何事も私一人だけの力で出来た事は一つなかったということだ。多くの出会いと御力添えに恵まれてきたおかげで心が蘇生され、再生への道を歩けるようになったのだ。〈人は自力だけでは絶対に生きられない〉今ではもう、その意味がよく分かる。(中略)『自力』で生きようなどと意地を張らず、『他力』によって生かされている感謝を忘れずに、笑顔で生きて行く。それこそが夫が私達に望んでいる『生きかた』であり、夫への一番の恩返しなのだ、お遍路によって気付かされた⁽⁵⁰⁾」。

高久氏もまた、遍路体験記で心境の変化について語っている。葉っぱが緑から紅葉して散る。それは変化にすぎないのであって、いのちは永遠であるとい

(50) 安田, 前掲, 226-227 ページ。

う『葉っぱのフレディ』の話が体験記に挿入されている。親鸞の「摂取不捨」にも言及される。「私たちは自分が生きる、自分が死ぬ、としか自覚できない。だから私たちは生まれてきて意味が生じ、死ぬと無に帰すると考えがちである」。しかし、大自然の設計者の立場から見ると、「私たちは全て“生という場”で遺伝子の混合（多様化）を起こすためのキャリアーである」。私たちはこの世の表舞台に一度だけ登場するにすぎないが、遺伝子は舞台裏で永劫続いていく。⁽⁵¹⁾ここには「私が自然を見る」という視点から、「大自然の立場で私を見る」という、視点の180度の転換が見られる。このような見方の転換こそが、白から黄、赤への変容の一プロセスであるように思われる。

終始一貫、ほとんど暗さを感じさせないお遍路体験記もある。近藤優『四国遍路托鉢野宿旅』は、プラスの人生がさらなるプラスに成長していくようなお遍路体験記である。近藤氏は四国八十八ヶ所7回参拝の先達さんであるが、平成14年に托鉢野宿による遍路をした。「巡拝の仕方は人それぞれですが、私は四国に渡る交通費と、一日分の納経料と食事代のみを所持し、当日から托鉢を行って頂戴したご報謝で全ての費用を賄うことにしました。心身共に引き締る思いで臨み、真剣ではありましたが悲壮感は全くありませんでした。それは何事も全て、お大師様の思召しであると信じ切っていたからです。善い事があればお大師様のお恵みと思い、そうでない時は戒めと解釈し、何事も有り難いと受けとめることにしました。『信じる者は救われる』。それを私は最高の拠り所とし、そして、自分自身を信じ、灯明とし、事欠ければ目覚めの道と認めました」。⁽⁵²⁾まえがきにそのように書かれているとおり、常人には容易に真似できない修行の旅が本文でも淡々と綴られている。「遍路道をできるだけ歩き、自身の心を高め、より目覚め、いかに悩みを癒すか、諸願を一心に祈念し、托鉢本来の意味と心構えをしっかりと把握して、一人でも多く結縁したい、そのために精進して行こう。これが私の理想なのです」と理想が語られている。⁽⁵³⁾次のよ

(51) 高久、前掲、52ページ。

(52) 近藤優『四国遍路托鉢野宿旅』文芸社、2004、3-4ページ。

(53) 同上、56ページ。

うなお遍路さん同士の会話も紹介されている。「托鉢の話の中で、私は喜捨に恵まれていますと話すと、その遍路が、それは近藤さんの人間性が良いから、と言ってくれました。すべての面で有り難いと感謝するのが仏教であり、信仰だと思います。当然と思うのは高慢でしょう。私はいつも有り難いと思い、そして真面目でありたいのです。これが私の人生の指針であります」⁽⁵⁴⁾。

書物の末尾の部分はこうである。「帰宅すると家内という、^{おだいし}小大師さんがにっこり笑い、『お遍路さん、お帰りなさい、長き旅、ご苦労様でした』この言葉、この笑顔がとてとても嬉しかったのです。四国の遍路道も、高野山も、我が家も我が心も日本晴れでした。ありがとうございました」⁽⁵⁵⁾。驚くほど明るいお遍路体験記である。

おわりに

四国遍路の再生プロセスを明らかにしたいという目標設定で本稿を書き進めてきたが、現状では、不十分な試論にとどまらざるをえない。お遍路体験記は膨大な数に上るので、それらすべてに目を通すという課題を達成するにはまだかなりの時間がかかりそうである。ただ、本稿の基本的な構成はそれほど変えることにはならないのではないかという予感はある。さらに多くのお遍路体験記に目を通すことができれば、そして自分自身の歩き遍路体験がさらに増え、深まれば、より適切な事例をあげて、より正確に、さらに詳細に説明ができるのではないかと思う。四国遍路でわからないことはたくさんあるが、とりわけ、私のいちばんの宿題になっていることは、いわゆる「お四国病」のような現象がなぜ起きるかということの解明である。黒木賢一氏は、「無意識の働きにより、スピリチュアリティ（霊性）が発現することで、歩くという修行体系に入り込んだと言える。『病』という病理性ではなく、『縁』による修行体系と考える方が自然であろう」と述べている⁽⁵⁶⁾。「病」ではないというのは全く同感であ

(54) 同上、144 ページ。

(55) 同上、223 ページ。

(56) 黒木、前掲、41-42 ページ。

る。本稿「5. 悟り：キトリニタス，ルベド」で紹介した近藤氏は四国遍路7回巡拝の先達さんなので，立派な「お四国病」であろう。いわゆる「お四国病」はこの項目で扱うべき事柄ではないかと思うが，もっと資料を集めなければ確かなことは言えないように思う。今後の課題としたい。